

福井県指定文化財の新指定について

福井県文化財保護審議会から、下記の12件の文化財を福井県指定文化財に指定することについて答申がありました。

県指定文化財の新指定 12件

種別	文化財の名称	所在地	所有者(管理団体)
絵画	けんぼんちやくしよく じぞうじゅうおうず 絹本著色 地蔵十王図	越前市蓬萊町 8-8 (越前市武生公会堂記念館)	えいせんじ 宗教法人永泉寺
	けんぼんちやくしよく じぞうじゅうおうず 絹本著色 地蔵十王図	小浜市遠敷 2 丁目 104 (県立若狭歴史博物館)	あたごじんじゃ 宗教法人愛宕神社
	しほん きんじ ちやくしよく じょうない ごてん 紙本金地著色 城内御殿 ふうぞくず ろつきよくびょうぶ 風俗図 六曲屏風		まんとくじ 宗教法人萬徳寺
	けんぼんちやくしよく ほうねんしょうにんぞう 絹本著色 法然上人像 つけたり きゅううらがき ぶく 附 旧裏書 1 幅	あわら市轟木 4-50	じょうこうじ 宗教法人浄光寺
彫刻	もくぞう しょうかんのんぼさつりゅうぞう 木造 聖観音菩薩立像	福井市飯塚町 23-1	かんのんこうこうちゅう 観音講中
	もくぞう だいにちによらいざぞう 木造 大日如来坐像	小浜市遠敷 2 丁目 104 (県立若狭歴史博物館)	はんせいくろこまく 小浜市飯盛黒駒区
	もくぞう しょうとくたいしりゅうぞう 木造 聖徳太子立像	永平寺町東古市 22-145	ほんがくじ 宗教法人本覚寺
	もくぞう なむぶつたいしりゅうぞう 木造 南無仏太子立像		ほんがくじ 宗教法人高岳寺
工芸品	ししゅう しゅじたいぞうかいちゅうだい 刺繍 種子胎蔵界中台 はちよういんまんだら 八葉院曼荼羅	坂井市丸岡町篠岡 23-8	こうがくじ 宗教法人高岳寺
	うるしぬり たいこがたさげづつ 漆塗 太鼓形酒筒 つけたり きりこしらかたせん ころも 附 切り頭形栓 1 個	鯖江市舟津町 1 丁目 2-32	ふなつじんじゃ 宗教法人舟津神社
無形民俗	オシッサマのお渡り <small>わた</small>	福井市本堂町	たかおじんじゃほうさんかい 高雄神社奉賛会
考古資料	はなのたにこふんぐんしゅつどひん 花野谷古墳群出土品	福井市渕 4 丁目 748 (福井市文化財保護センター)	福井市

1 ^{けんぽんちやくしよく}絹本 著色 ^{じぞうじゅうおうず}地蔵十王図

(1) 所在地 越前市蓬萊町 8-8 (越前市武生公会堂記念館寄託)

(2) 所有者 宗教法人永泉寺 ^{えいせんじ}

(3) 員数 1 幅

(4) 法量／時代 縦 108.2cm、横 58.8cm / 鎌倉時代

(5) 由来・特徴

仏教における地獄の亡者 ^{もうじゃ}を救済する地蔵菩薩と、道教で信仰されていた亡者の罪を裁く十王とを一幅に描いた図である。

本図の地蔵菩薩は右向きで、二重の円光背 ^{えんこうはい}を負い宣字座 ^{せんじざ}と称される台座に座る姿が描かれ、その左右には従者、下には十王が描かれている。同じ形式の図は例が少なく、国内で数点が確認されているのみである。地蔵菩薩の衣は切金 ^{きりかね}や金泥 ^{こんでい}による文様が描かれ、装身具には金箔が用いられるなど、華麗な装飾がみられる。

県下には本図だけでなく、小浜市 ^{あたご}愛宕神社にもう 1 幅が伝わる。なお本図は、享保 2 年 (1717) に修理されており、明治 13 年 (1880) に永泉寺に寄付されたとの記録がある。



2 ^{けんぽんちやくしよく}絹本 著色 ^{じぞうじゅうおうず}地蔵十王図

(1) 所在地 小浜市遠敷 2 丁目 104 (県立若狭歴史博物館寄託)

(2) 所有者 宗教法人^{あたご}愛宕神社

(3) 員数 1 幅

(4) 法量/時代 縦 86.7cm、横 37.5cm / 南北朝時代

(5) 由来・特徴

本図は、水墨画により描かれた山中に坐す地蔵菩薩と十王を描いたものである。地蔵菩薩は二重の^{えんこうはい}円光背を負って蓮台上に坐し、右手に^{しゃくじょう}錫杖を執り、左手は足上に置く。

本図は、浅井長政とお市の方との間に生まれた浅井三姉妹のひとりで、関ヶ原合戦後若狭を支配した京極高次の正室であったお初の方(常高院)^{ねんじぶつ}の念持仏であったと伝えられ、夢のお告げにより^{じじょ}侍女に命じて^{のちせやま}後瀬山の愛宕神社に寄進されたものという。本図は、若狭小浜の歴史を語る上で欠くことができない貴重な図である。



3 紙本金地 著色 城内御殿風俗図 六曲屏風

- (1) 所在地 小浜市遠敷2丁目104 (県立若狭歴史博物館寄託)
- (2) 所有者 宗教法人萬徳寺
- (3) 員数 1双
- (4) 法量/時代 右隻：横 372.6cm、縦 157.2cm、左隻：横 373.2cm、縦 157.6cm / 江戸時代

(5) 由来・特徴

城内御殿の内部の様子を描いた、六曲一双の屏風で、17世紀の制作とみられる。右隻には、武術の稽古に励む様子や蹴鞠や立花などの遊芸に興じる人びとの姿を生き生きと描く。対照的に左隻には、城内の秋の景色と文芸に親しむ人びとなどを静かな雰囲気の中で描いており、描かれた当時の大名の風俗や生活文化が窺われる。

屏風の左右両端には印章があり、これによって筆者は久保田藩（秋田藩）の佐竹氏に仕えた狩野定信とわかる。定信の描いた数少ない絵画として貴重である。

(右隻)



(左隻)



4 ^{けんぽんちやくしよく}絹本著色 ^{ほうねんしょうにんぞう}法然上人像

- (1) 所在地 あわらし轟木 4-50
(2) 所有者 宗教法人^{じょうこうじ}浄光寺
(3) 員数 1幅
(4) 附(つけどり) 旧裏書 1幅
(5) 法量/時代 縦 76.8cm、横 36.5cm / 室町時代(文安3年(1446))

(6) 由来・特徴

薄墨色の袈裟を着用し、^{じゆず}数珠を両手で^{つまぐ}爪繰りながら^{らいばん}礼盤上に端坐し、柔和な表情を見せる浄土宗の宗祖法然を、やや粗い絹本に描く。

浄土真宗系の法然上人像としては定型の法然上人像であるが、付属の裏書(縦 47.5cm、横 19.0cm)の^{かんし}干支と^{かおう}花押から、本図が本願寺第七世存如から文安3年(1446年)に浄光寺に下付したものであることがわかる。

制作年が明らかであり、本願寺が下付した法然影像のなかでは最古の一例である。



5 ^{もくぞう}木造 ^{しょうかんのんぼさつりゅうぞう}聖観音菩薩立像

(1) 所在地 福井市飯塚町 23-1

(2) 所有者 ^{かんのんこうこうちゅう}観音講講中

(3) 員数 1 ^く 軀

(4) 法量／時代 像高 152.5 cm / 平安時代

(5) 由来・特徴

^{ひのき} 桧と思われる木造素地の^{いちぼくわりはぎ}一木割矧造りの^{しょうはく}聖観音立像である。^も条帛・天衣・裳・^{ほうかん}腰布のほか^{さんかみ}山形宝冠を着け、左手に^{みふれんげ}未敷蓮華を持ち（欠失）、右手を垂下して五指を伸ばす。

奈良時代の^{ぎょうき}僧行基が巡行の折、^{ずいむ}瑞夢により一字を建立し、本像を制作したと伝えられる。また天正元年（1573）の兵乱の際には、この像は自ら^{かやのがはら}茅野ヶ原に移り難を逃れたとの伝承がある。

本像は秘仏であり、平成 30 年 4 月に飯塚観音堂で 17 年ぶりの開帳を行っている。

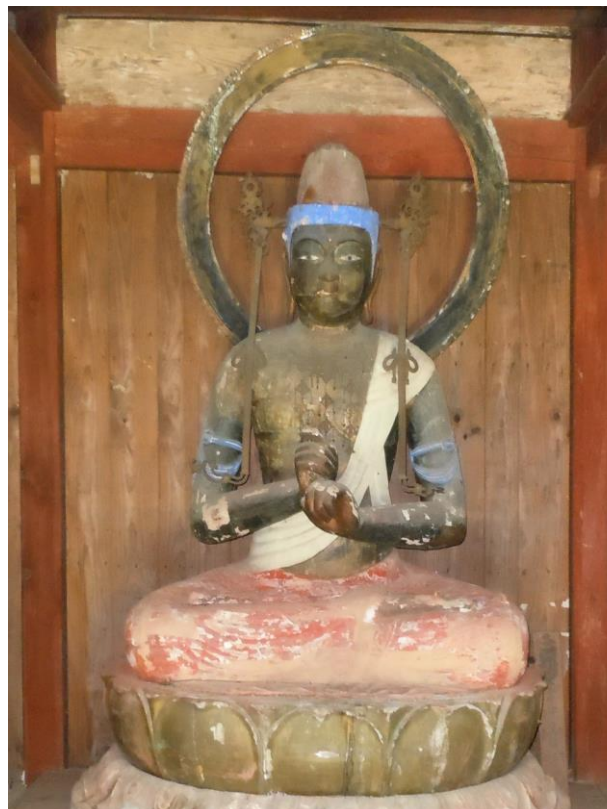


6 ^{もくぞう}木造 ^{だいにちによらいざぞう}大日如来坐像

- (1) 所在地 小浜市遠敷2丁目104 (県立若狭歴史博物館寄託)
- (2) 所有者 小浜市^{はんせいいくこま}飯盛黒駒区
- (3) 員数 1^く 軀
- (4) 法量/時代 像高 157.5 cm、膝張 115.0 cm、坐奥 81.1 cm / 平安時代
- (5) 由来・特徴

小浜市の黒駒大日堂に伝わる、若狭では最古の大日如来坐像である。^{ちけんいん}智拳印を結び、^{もとどり}髻を結び、^{ほうかん}宝冠をいただく姿で、表現は平安時代後期の浅く穏やかな彫口を示している。目は彫眼で^{じょうはく}条帛には優雅な^{えもん}衣文を刻み、両腕には^{わんせん}腕釧をつけている。^{ひのき}桧材の一木造で、構造は単純ながら極めて古様で、平安時代後半頃の特徴を示す。台座および^{こうはい}光背は近世の補作であるものの、若狭でもまれな^{はんじょうろく}半丈六の大日像として当初の姿を留めている。

黒駒区はかつて^{おんじょうじ}園城寺領であった^{かど}加斗荘に含まれていたことから、園城寺および天台宗との関連が想定される。



7 ^{もくぞう}木造 ^{しょうとくたいしりゅうぞう}聖徳太子立像

(1) 所在地 永平寺町東古市 22-145

(2) 所有者 宗教法人^{ほんがくじ}本覚寺

(3) 員数 1 ^く 軀

(4) 法量／時代 像高 132.9cm / 鎌倉時代

(5) 由来・特徴

^{よせぎづくり}寄木造で^{ぎよくがん}玉眼を入れ、彩色をほどこす。聖徳太子が16才のとき、父親である用明天皇の^{へいゆ}病氣平癒を祈願する姿を表したもので、^{きょうよう}孝養像と称される。^{こんでい}金泥などを用いた制作当初の彩色が全体に残っている。

本像の構造や細部表現は、^{ほんしょうじ}愛知県本證寺の聖徳太子像と近似することが指摘されており、中世越前における浄土真宗の展開をものがたる文化財の一つである。本像は秘仏であり、33年に一度御開帳法要が行われる。



8 ^{もくぞう}木造 ^{なむぶつたいしりゅうぞう}南無仏太子立像

(1) 所在地 永平寺町東古市 22-145

(2) 所有者 宗教法人^{ほんがくじ}本覚寺

(3) 員数 1 ^く 軀

(4) 法量／時代 像高 69.1cm / 鎌倉時代

(5) 由来・特徴

^{ひのき} 桧材の^{よせぎづくり}寄木造で、^{ぎよくがん}玉眼を入れ、彩色をほどこす。この形式の像は南無仏太子と呼ばれ、聖徳太子2歳の姿を写したものとされる。袴をつけた^{らぎょう}裸形の若い太子が誰からも教えられることなく合掌し、東に向かい「南無仏」と称えたという有名な説話にもとづく像とされる。

このような太子像は、北信越地域を中心に比較的多く分布するが、本像は鎌倉時代の優れたものの一つである。また、本覚寺蔵の木造聖徳太子立像にみられる表現方法から、本像も同一の仏師によりほぼ同時期に制作されたものと考えられている。



9 刺繡 種子胎蔵界中台八葉院曼荼羅

- (1) 所在地 坂井市丸岡町篠岡^{しのおか}23-8
- (2) 所有者 宗教法人高岳寺^{こうがくじ}
- (3) 員数 1幅
- (4) 法量／時代 縦 100.5cm、横 36.3cm / 南北朝時代

(5) 由来・特徴

丸岡藩主有馬氏^{ありま}の菩提寺^{ぼだいじ}である天台宗高岳寺に伝来する繡仏^{しゅうぶつ}。胎蔵界曼荼羅の中心部である中台八葉院を、絹地に様々な色糸で精緻に刺繡する。蓮華の中心に大日如来、四方に四如来、斜め四方に四菩薩の種子を毛髪^{いろいと}の刺繡（髪繡^{はつしゅう}）で表す。中台八葉院の上方に天蓋^{てんがい}、下方に香炉・花瓶を安ずる三足机^{さんそくき}を描くのは、阿弥陀三尊像などを表す他の作例の図様と通じている。以上を表す額の上方には、5文字2段、12行からなる経文^{きょうもん}を髪繡する。右から2行ずつ、『大日経』、『無量寿経』、『法華経』^{ほうべんほん}方便品、『同』如来寿量品^{にょらいじゅりょう}、『観普賢経』^{かんふげん}、『法華経』^{けじょうゆ}化城喻品より採った偈文で、本品が密教と顕教の教理を合わせ追善供養を行う天台宗の儀礼に用いられたことを窺わせる。刺繡の表現技法から南北朝時代の作とみられ、中台八葉院を単独で描き、顕密經典の偈文を表す唯一の繡仏作例としてきわめて貴重である。

10 漆塗 太鼓形酒筒

- (1) 所在地 鯖江市舟津町1丁目 2-32
(2) 所有者 宗教法人舟津神社
(3) 員数 1口
(4) 附(ついたり) 切子頭形栓 1個
(5) 法量/時代 総高 75.5cm、胴径 57.4cm、前後直径 50.8cm、胴厚 34.3cm
/ 室町時代
(6) 由来・特徴

木造、太鼓形の胴をもつ酒筒。皮張りの鼓面に相当する前後面を黒漆塗りとし、一方の面に竹虎図、もう一方の面に雲龍図を朱漆で描いて、胴にかかるところには鉾に当たる墨座を表している。上部には菊花座の注口を設け、切子形の木栓で塞ぐ。胴の底近くには、朱漆により、応永二十〇年の年紀のほか、鯖江惣社(舟津神社)の常住物で、「一对二百文の損料が無くば借用不可」とする旨を記す。銘の通り本来は1対で用い、亡失したもう1口のものと思われる木栓が1個伝来する。

太鼓形酒筒は、『一遍上人絵伝』など中世絵巻物の描写から日常什器として用いられたことが知られるが、中世に遡る伝存品は全国でも数例が知られるにすぎない。本品は、朱漆銘により当初から舟津神社什物として伝来したことが判る点でもきわめて貴重な作例といえる。



1.1 オシッサマのお渡り^{わた}

(1) 所在地 福井市本堂町

(2) 保存団体 ^{たかお} 高雄神社奉賛会

(3) 由来・特徴

福井市本堂町の高雄神社に伝わる、獅子頭^{ししがしら}に神衣^{かみい}と呼ばれる和紙をつけ、集落の家々を訪問したり、高雄神社と松手の宮との間を往復したりする、お渡りの行事である。この行事は、『越前国名蹟考』(文化12年(1815年))に記述があり、少なくとも近世後期には行われていたものと考えられる。現在は10月の体育の日の前日に、高雄神社秋季例大祭の行事として行われている。

怪物に生贄^{いけにえ}を出していたところを、猿田彦大神の子孫の武士が救ったと伝承されており、祭りの行列では、先頭に猿田彦大神の面を立て、オシッサマはこの妻の天鈿女命^{あめのうずめのみこと}を表している。かつて生贄を出したとされる家々を回る七郷廻り^{ななごう}では、更毛^{さらげ}、本堂^{ほんだう}、羽坂^{はざか}、細坂^{ほそざか}、安田^{やすだ}、北堀^{きたほり}、恐神^{おそがみ}の7集落14軒の家でもてなしを受ける。

秋季例大祭前日の夜には、オシッサマが生贄を出したとされる橋の近くの松手の宮まで巡行し、子供達によって、生贄の伝説を伝える歌が披露される。松手の宮ではオンモクと呼ばれる、糯米^{もちごめ}と粳米^{うるちまい}を混ぜて作ったご飯の取り合いが行われる。

獅子頭につける神衣を作る作業は神衣切りと称し、この作業ができ、オシッサマの獅子頭を冠ることを許されているのは、代々高雄神社を守護してきた守護職と呼ばれる4家の当主に限定されている。

なお、14軒の家や守護職は別の行事では特に役割は与えられておらず、本行事のみで役割を果たすことになっているのも特徴の一つである。

この他、子供による触れ太鼓、お渡りの際の太鼓、七郷廻りの際の氏子総代によるお迎えなど、行事は昔ながらの形で現在に伝えられている。



1 2 はなのたにこふんぐんしゅつどひん 花野谷古墳群出土品

- (1) 所在地 福井市渚4丁目748(福井市文化財保護センター)
- (2) 所有者 福井市
- (3) 員数 一括
- (4) 時代 古墳時代前期～中期(4世紀前半頃～5世紀末)
- (5) 特徴

花野谷古墳群は、福井市花野谷地区に所在し、10基からなる古墳群である。このうち花野谷1～3号墳については、平成12年度に発掘調査を実施。1号墳は直径20mをはかる円墳で、銅鏡(中国製の連弧文銘帯鏡・三角縁神獸鏡)をはじめ、まが勾玉やくだ管玉、ガラス玉、漆製品、鉄剣、鉄鏃、とうす刀子等が副葬品として出土した。三角縁神獸鏡は、県内では完全な形で発見されているのは本品のみである。古墳の築造時期は、古墳時代前期前半(4世紀前半頃)と考えられる。2号墳は、全長19mの帆立貝式ほたてがいの前方後円墳で、銅鏡(乳文鏡・内行花文鏡)をはじめ、1万点を超える白玉や、勾玉、管玉、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉄斧、てっぶ豎櫛等が副葬品として出土した。古墳の築造時期は、古墳時代中期後半(5世紀前半頃)と考えられる。3号墳は直径12～13mをはかる円墳で、鉄刀・鉄鏃・鉄斧・といし砥石等が副葬品として出土した。古墳の築造時期は、古墳時代中期後半(5世紀末頃)と考えられる。

本件は、いずれも小規模な古墳ながら豊富な副葬品を有し、しかも内容から時代の変遷を追うことができ、こし越の古墳時代の様相を解明するうえで、学術的な価値が高い。



(写真提供: 福井市文化財保護センター)

1号墳出土三角縁神獸鏡(直径22.0cm)